エッセイ特集２
ヴィクトリア朝研究の新しい視点

『崩れゆく絆』の余白
――ヴィクトリア時代の黒人宣教師

粟飯原　文子

1958年、アフリカ独立の夜明けに出版された、チヌア・アチェベ（Chinua Achebe, 1930–2013）の第一作目の小説『崩れゆく絆』では、イギリス帝国主義がアフリカ大陸へと本格的に進出し、「アフリカ争奪戦」が激化するヴィクトリア時代後期、イボランドと呼ばれる現在のナイジェリア南東部に位置する架空の土地、ウムオフィアを舞台に、独自に発展していた社会と文化が瓦解していくプロセスが見事に描かれている。1950年代後半から60年代前半、ちょうどアフリカで独立国家が次々と誕生していく希望に溢れた時代にあって、アチェベの小説は大陸の新しい幕開けを象徴する作品として祝福された。すでにアフリカにおいて文学作品は相当数生み出されていたにもかかわらず、アチェベが「アフリカ文学の父」と呼ばれるゆえんは、時代状況に応えるかのように、新しいアフリカ文学の展望、主題や手法のモデルを提示することに成功したからであった。

その一つとして、独立期にあえて19世紀後半にまで遡り、植民地支配が始まる直前の激動の時代を選んで小説の舞台としたことがある。そしてそれには明確な意図があった。まず指摘されるのは、ヨーロッパのアフリカ探検が始まって以降、さまざまな文献において流布され増幅されてきたアフリカの否定的なイメージに対する批判・介入の試みである。とりわけヴィクトリア時代には、18世紀後半から続いてアフリカ探検が盛んにおこなわれ、アフリカ大陸は調査、発見、記録される対象として数々の探検家・旅行者により記述されるとともに、フィクションの題材にもなり、ニュアンスの違いはあれ、野蛮で未開の地、歴史と文明を欠いた闇という印象が強化されていく。こうしたアフリカのイメージへの挑戦、いわば文学の脱

植民地化の企図において重要であったのは、ケニア人批評家サイモン・ギカンディによれば、「二重のミメーシス」である。19世紀に顕著となる帝国主義的なアフリカ表象を問いただすと同時に、アフリカ社会の諸相を複雑に、繊細に、リアルに描くこと、そして歴史と空間を再構築し、人びとをそこに生きる近代的主体として描き直すこと――リアルの効果を二重に探求すること――が当時のアチェベにとって喫緊の課題であった。

『崩れゆく絆』では、第1部、実に全体の三分の二にわたって、ヨーロッパ勢力到来以前の高度に発達した共同体の生活が包括的、動態的に描き出され、まさに歪められたアフリカのイメージに対する文学での批判的応答となっている。そしてこのようなウムオフィア社会の緻密な描写があるからこそ、第3部で描かれる悲劇性が――キリスト教と植民地支配勢力の到来により、それまで維持されてきた文化や慣習、制度や価値観が徹底的に、取り返しのつかないほど変化を遂げ、豊かな社会が急速に衰退し、崩壊の一途をたどっていくさまが――いっそう際立つことになる。

もちろん、アチェベの作品が優れているのは、悲劇の要因を外部勢力の侵入だけに求めるのではなく、社会の内部に潜むさまざまな矛盾や弱点を問題化したうえで、植民地主義の破壊的な影響を探っているところである。とはいえ、社会が激震し、崩壊していく触媒となり、それゆえもっとも大きな物語の転換点となるのは第2部終盤での宣教団の到来であることは間違いない。植民地的遭遇（colonial encounter）とも呼ばれるこの歴史の決定的な転機が訪れる19世紀後半を舞台に据え、アフリカ人の視点から、かれら自身の経験として「初めてヨーロッパと出会った際に受けたトラウマ的な影響」を描き直すことにこそ意味があった。

こののち結末へと向かう流れのなかで強烈な印象を残すのは、牧師のブラウン氏やその後任のスミス氏、それに最後に現れる地方長官といった「白人」の登場人物である。こうした白人との邂逅の場面がより象徴的でインパクトが強いために看過されがちであるが、小説を実際の歴史的文脈に位置づけたときにむしろ問わなければならないのは、宣教団の大部分を占めているのが「黒人」であることだ。以下の引用では、宣教団のなかに「イボ人」、「黒い男」がいることが示されている。

> 人びとが集まると、白人が話し始めた。白人はイボ人の通訳をとおして話したのだが、ただし、この通訳にはムバンタの人には聞き慣れない耳障りな訛りがあった。男の訛りやおかしな言葉遣いを聞いて、多くの人が笑った。「わたし自身」と言うと、ずっと「わたしの尻」と聞こえた。だが、男には威厳があったので、人びとは彼の話に耳を傾けた。わたしは、肌の色と話す言葉でわかるように、あなたたちの仲間です、と男は言った。四人の黒い男も兄弟です。ひとりはイボ語を話しませんが。白い人も同じように兄弟です。みな同じく神の息子だからです――。(『崩れゆく絆』、光文社古典新訳文庫、2013年、222頁)

ここで話している宣教師兼通訳のキアガ氏は第2部の16章から18章まで続けて登場し、教会を建て、イボ語で教えを説き、次々に信徒を集めていく。実のところ、イボランドにおける黒人宣教師たちの存在は歴史的事実によっても裏書きされる。英国教会伝道協会(Church Missionary Society, CMS)では、ヴィクトリア時代からいち早くアフリカ系の人びと――そのほとんどがイボ系のシエラレオネ出身者――が実際に村人のあいだに入って宣教活動を担っていたのである。

このことはアチェベの父、アイザイア・オカフォー・アチェベの経験からも見て取れる。1892年、現在のアナンブラ州、オギディで叔父とともに暮らしていたとき、CMSの宣教師たちがやって来た。幼いオカフォーは説教をしたり、讃美歌を歌ったりする宣教団に心を奪われ、つねに後をついてまわったそうだ。むろん宣教団はほとんど黒人で成立していた。叔父は「気が狂った」宣教師たちの企てに眉をひそめていたものの、オカフォーは自ら新しい信仰を選びとり、洗礼を受けてアイザイアの名を得、この地方で最初の改宗者の一人となった。1904年、アウカ(現アナンブラ州の州都)の聖ポール教員養成校に送られて教育を受け、卒業後にはオギディに戻り、まず聖ポール教会を、さらに、より大きな教区のための聖フィリップ教会を建設する。そして1935年に職を退くまで、イボランドのいくつかの町で伝道師を務めたのだった。このようにアチェベの父も、イングランド国教会がアフリカでの布教に必要とした、いわゆる「原住民仲介者」となり、イボ人のあいだにキリスト教を根付かせるために尽力した人物であった。

熱心なキリスト教家系に生まれたアチェベは、こうしたイボランドへの、

ひいてはナイジェリア、アフリカ大陸へのキリスト教の影響をどのように見ていたのだろう。神々への信仰を含む「伝統的」とみなされるものすべてを厳しく非難し、撥ねつけていた父、そしてナイジェリア東部で初となるヴィクトリア朝流の花嫁学校に通った母、という信仰心の篤い「西洋化」した両親に育てられたアチェベは、幼少期より厳格なキリスト教教育を受けていた。しかし同時に、周囲では近親者を含む多くの人びとが従来の生活と信仰を守っていたため、日常的にはさまざまな宗教儀礼や祝祭などに慣れ親しんでもいたという。アチェベはそのような「文化の交差路」のなかで成長し、植民地教育を受けた知識人のある典型として、キリスト教の価値観を重んじ、西洋的な教養を身につけながらも、それをもたらした植民地主義の制度に反旗を翻し、その支配の論理と甚大な影響を内在的かつ歴史的に考察しようとした。それゆえ小説では、キリスト教が一方的に断罪されるわけではなく、ウムオフィア社会が抱えるひずみが炙り出されて、被抑圧者たちに新しい可能性と救いをもたらす契機としても描かれる。いうなれば、侵略と救済という相矛盾する二つの視点から、イボランドのキリスト教化の経験がとらえられ、共同体が大きな変化を迫られる複雑な歴史的過程が呼び起こされ、検証されているのである。

では『崩れゆく絆』において、キリスト教到来という歴史的事件の一部として描かれるだけで、具体的に語られることのない黒人宣教師とは、実際にどのような人びとだったのか。小説の歴史的・地理的文脈を少し広げてみると、興味深い事実が浮かび上がり、その余白が補完されることになるだろう。ヴィクトリア時代に生まれた黒人宣教師は、キリスト教布教において中心的な役割を果たしただけではなく、西アフリカ最初期の知識層を形成していた。なかでも真っ先に名前があがるのが、1864年にアフリカ人として初めて国教会主教となり、19世紀後半を通して大英帝国の版図でもっとも有名なアフリカ系キリスト教徒であったサミュエル・アジャイ・クラウザー（Samuel Ajayi Crowther, 1807–91）である。クラウザーが19世紀アフリカの知識人として重要な人物の一人に数えられる理由には、宣教活動の枠内とはいえ、教育の普及や民族語での出版に貢献したこと、なにより「ニジェール遠征」に同行して自らその記録を残していることがあげられる。

19世紀の西アフリカにおいて、西洋化されたアフリカ人知識層の大部分は、1807年のイギリスの奴隷貿易廃止法成立と1834年の奴隷制廃止法成立の余波のなかで出現した。すでに解放奴隷の帰還先となっていたシエラレオネ（リベリアも同様）は、1808年にイギリスの直轄植民地となり、奴隷船から英海軍に救出され、キリスト教に改宗した人びとが次々に再定住したこともあって、西アフリカにおける国教会と貿易の一大拠点へと発展する。それとともに、教育と訓練を受けて商人、職人、教師、さらには伝道師や宣教師になるアフリカ人も多く現れて、嗜好も態度も自己認識もヴィクトリア朝的なアフリカ人エリート集団が形成されていった。

クラウザーはまさにシエラレオネを中心に広がった西アフリカの新興エリート層を代表する人物である。およそ13歳のころ、内戦のただなかにあったナイジェリア南西部で捕らえられ、奴隷として売られてアメリカ行きの船に乗せられた。しかし、英海軍に奴隷船が拿捕され、クラウザーは無事救出されて、シエラレオネのフリータウンで解放される。まもなくCMSのもとで洗礼を施され、ロンドンに派遣されて教育を受けることになった。そののちフリータウンに戻り、1827年、CMSが開校したフォーラー・ベイ・カレッジ（西アフリカ最古の西洋式大学）で最初の学生となる。

そして1841年、イギリス政府の公認を受けた、宣教と商業の推進、奴隷貿易根絶を目的とするニジェール遠征に同行する。最初の試みとなる遠征で熱帯病によりヨーロッパ人参加者の三分の一もの死者が出たことから、ニジェール川流域は「白人の墓場」と呼ばれるようになった。なお、この件がチャールズ・ディケンズの『荒涼館』（1852-53）で言及されているのは周知のとおりである。遠征自体は大きな挫折に終わったとはいえ、このとき、イボランドに初めてキリスト教がもたらされ、イボ系シエラレオネ人の通訳、サイモン・ジョナスがアボ（現デルタ州）で数週間を過ごして説教をおこなったことが記録に残されている。続いて1843年、クラウザーはナイジェリア南西部の町、アベオクタ（現オグン州の州都）に赴いて国教会の建設にかかわる。ヨルバ語話者であるクラウザーはヨルバ語での宣教に尽力し、1851年にはヴィクトリア女王に謁見して、「主の祈り」をヨルバ語で唱えたことも知られている。

その後クラウザーは、1854年、57〜59年にも、ニジェール遠征に参加し

ている。57年に始まる遠征では、オニッチャ（現アナンブラ州）で初の宣教拠点が築かれ、同行したサイモン・ジョナス、ジョナスと同様のイボ系シエラレオネ人、ジョン・クリストファー・テイラーが残って、周辺地域の宣教活動に従事することになる。これを契機として以後30年余りにわたり、この地域には多くのナイジェリアにルーツをもつシエラレオネ出身者がやって来て宣教に携わるようになった（1897年に初めて、地元出身のジョージ・ニコラス・アンヤエブナムが教役者の地位につく）。こうしてクラウザーが大きく貢献した三度の遠征で、ニジェール川流域はキリスト教の布教、貿易、そして植民地支配に明け渡されていく。その功績からクラウザーは1864年にはアフリカ人初となる主教に聖別され――カトリック教会で初のアフリカ人司教の誕生が1939年であったことに比べるとかなり早い時期である――、「ニジェール・ミッション」はクラウザーの統括のもとで、アフリカ系の人びとによって担われていった。以上のような一連の流れが、『崩れゆく絆』で宣教団がやって来る直接の歴史的背景である。

クラウザーの知的遺産として、1842年、55年、59年にCMSが出版した遠征記がある。1842年版には37年に書かれた短い自伝も加えられており、激動に満ちた生い立ちが明らかにされている。71年にはパンフレット形式でニジェール遠征の冒険譚が発行された。加えて、彼の言語学者としての功績も指摘されなければならないだろう。1843年（52年改訂版）のヨルバ語語彙集、52年のヨルバ語文法、64年のヌペ語の語彙・文法、82年のイボ語語彙集などをはじめとした言語に関する多数の書物、71年には新約聖書のヨルバ語訳が出されている。また、クラウザーの助言により、テイラーは聖書のイボ語訳に取り組んだ。

このようにアフリカでの布教に邁進したクラウザーを筆頭とする黒人宣教師たちは、植民地主義の手先であり、そのイデオロギーの代弁者であったと言えるのだろうか。なによりクラウザーの残した遠征記が、彼の考え方や立ち位置を考察する手がかりとなるだろう。時代状況に鑑みて、また彼の宣教師という立場からしても、遠征記の記述が、アフリカ人は精神の闇に囚われた存在で、信仰と文明によって解放されなければならないといった人種主義的／植民地主義的言説に貫かれているのは当然である。探検記・旅行記によく見られる民族誌的描写に相似するところもあり、まさ

にアチェベが出発点で批判の対象としたアフリカ表象が反復されていることがうかがえる。しかし興味深いのは、その視点が徹底して分析的であることだ。それがもっとも顕著に見て取れるのは食人について言及されている箇所である。むろんクラウザーは「異教徒」による人身御供や食人の慣習を断固として否定しているのだが、その叙述は抑制がきいていて客観的な分析がともなうものであり、相対化の試みがなされている。一例として、1855年に出版された遠征記から、食人がおこなわれている村があるという噂を記したくだりを見てみよう。

> わたしたちはティヴ人が人食いだと聞いた。戦争で死んだ敵の死体を貪り食うのだそうだ。しかしわたしが考えるのは、このような野蛮な行為はただ敵方を恐怖に陥れるために戦時中にのみおこなわれるもので、習慣的なものではないということである。数年前、イジェブ人がアベオクタに侵攻して打倒されたことがあったが、そのとき、イジェブ人の死体はエバ人に切り刻まれ、巨大な鍋でぐつぐつ煮られていた。これを知ったイジェブはエバをますます恐れるようになったかもしれない。イジャイの首長イクミも妻の一人が殺害されて同様の野蛮な行為に及んだ。妻の復讐を果たすため、あるいは人びとを恐怖に陥れて殺人をやめさせるためだったのか。（*Journal of an Expedition Up the Niger and Tshadda Rivers in 1854*, London: Frank Cass, 1970, 11）

別の記録からもわかるとおり、クラウザーは食人行為を人種的な本質とみなすのではなく、戦争の暴力が介在した結果生じるもの、したがってどこででも、だれにでも起こりうるものと考えていたようだ。遠征記ではこうした部外者の視点から、行く先々の社会と人びとについて観察と分析が繰り返される。一方で、折に触れて自らをアフリカ人として位置づけ、アフリカ社会を内側からとらえようとする姿勢も見られる。クラウザーの記述は、同時代の人種主義的／植民地主義的イデオロギーを反復し、ときとして強化するものであるかもしれないが、この二重の立場を行き来することで、それがずらされ、再構成されていることを示してもいるのである。

そうしたクラウザーの二重の立場は、彼が従事した宣教活動自体においても確認できる。確かに、クラウザーたちは暗黒大陸に文明をもたらすと

いうキリスト教のロジックを内面化し、古くから続く信仰を野蛮なものとして蔑んでいた。そのうえ、キリスト教とともにヨーロッパ資本主義を内陸部にまでもちこみ、伝道と貿易の両方を推し進める役割を担い、植民地支配が進行する道筋をつけることにもなった。だがその反面、クラウザーが必ずしも支配側に同一化していたわけではないことも事実である。国教会に仕える忠実な僕として、その枠組みと規範のなかで行動し、思考していたのは疑いえないとはいえ、同時にそれを再解釈して革新的な考えへと変えようと試みてもいた。たとえば、彼の統括のもとでなされた教育の普及は、人びとにさまざまな技術訓練を受けさせ、イギリス支配と資本主義経済が拡大するなか、新しい時代状況を生き抜く力と知恵を身につけさせることを目的としていた。結果、多くの人びとがクラウザーの学校の魅力に引き寄せられて、国教会へと向かうことになったのだった。

ところが、クラウザーが考案した学校教育のあり方は、ヨーロッパ人の激しい批判に晒されることになる。ミッション・スクール出身者、「ミッション・ボーイズ」が力をつけて、ヨーロッパ人と対等に振る舞い始め、ともすれば競争相手になるかもしれないという不安が広がっていたのである。加えて、若いイギリス人宣教師たちが、クラウザーが長年かかって築きあげたアフリカ人による宣教ネットワークを破壊しようと目論んでもいた。こうしたことを含めて、クラウザーは人生の終盤において、教会内部の人種主義とそれがもとになった確執に苦しめられた。ただ、彼は黙って耐えるのではなく、辞職する道を選んで抵抗の姿勢を見せたのだった。

クラウザーは単にヨーロッパ人の期待どおりに振る舞うのではなく、むしろ与えられた基盤と権限を最大限に活用し、アフリカ社会の発展に役立てようと考え、活動していた。ヴィクトリア朝の価値観と文化規範、キリスト教的な倫理観を超えて思考し、行動することはなかったかもしれないが、アフリカ人としての立場から、アフリカとアフリカの人びとの未来を思い、アフリカ人キリスト教徒という新しい可能性を模索し、切り開こうとした。もちろん、クラウザーのヴィジョンはキリスト教のレトリックに満ちており、同時代を生きたシエラレオネのアフリカヌス・ホートン（Africanus Horton, 1835–83）、少し時代を下り、ナイジェリア・ナショナリズムの祖とされるクラウザー自身の孫、ハーバート・マコーレー（Herbert

Macaulay, 1864–1946）などが示したような政治性とは無縁である。ヴィクトリア朝人であり、アフリカ人でもあったクラウザーの遺産は、彼自身の立場がそうであったように矛盾含みであらざるをえない。しかしアフリカ人知識人の先駆者として、続く時代のナショナリストやアチェベら独立期の知識層が生まれる礎を築いたのも確かである。

クラウザーはキリスト教の展望と可能性を通じてアフリカの未来を見据えた。アチェベは小説のなかに来るべき時代への祈りを込めた。アチェベの物語では直接語られないとしても、クラウザーの残した遺産はその余白に漂い、継承され、更新されているのである。

――法政大学准教授